
雨の日の二重丸

カヲル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の日の二重丸

【Nコード】

N2756V

【作者名】

カヲル

【あらすじ】

子供の頃の 子供目線を思い出して……

先に他界した父に続いて 翌年に母が他界して
実家の後片付けをするために 私と三人の姉たちが実家に集まった。

玄関にある靴箱の中を片付けていた私は
その一番奥に立てかけられた一本の小さい傘を見つけた。

「赤い傘…… 私のだ」

自分が小学校低学年の頃に使っていた傘だと すぐにわかった。

赤い持ち手を握ってみると その小ささに驚く。

傘を広げて 大人になった自分が入ってみる。

頭の上に広がる赤い空間を見上げたら

遠い昔 その光景を初めて見たときの記憶が蘇った。

小学校1年生のとき…… 入学して初めて雨が降った。
朝は降っていなかったから 家を出るときには傘は持って来なかつた。

下校口で周りの様子を見てみると
次々と母親が小さい傘を片手にやって来て 自分の子供を探している。

目の前を帰って行く二つの傘。

大きい傘と小さい傘が並んで その二つの傘の僅かな隙間に
両側から伸びた手が繋がれているのが見える。

「傘と傘が繋がってる」

繋がった二つの傘が いくつもいくつも続いている光景を
私はしばらく一人で見ていた。

その傘たちの後姿の間を 逆方向に歩いて来る黒い大きな傘が見えた。

前に倒して傘を差しているから 本当に黒い大きな丸い傘だけが近づいて来るようだった。

目の前近くまで来て 黒い傘が持ち上がった。

「あ」

まさか…… と思ったその傘の下の顔を見て驚いた。

「お父さん！」

父親は左官業を営んでいるため 雨が降ると仕事にならない。
朝から本降りの日は仕事が休みになるし 途中からの雨は早く帰宅
する。

「お母さんが持っていてやってくれと言っからな」

それだけを言うと 手に持っていた傘を私に渡してくれた。

「新しい傘だー！ 赤いの！」

入学時に用意してくれた真新しい赤い傘を 父の大きな手から受け
取った。

きつと そのときの私は 満面の笑みで
自分の頭の上で その赤い傘を開いていただろう。

普段いつも使う物ではないというだけで 嫌な雨も特別なものに変
わっていた。

上を見上げると 頭の上一杯に 真っ赤な世界が広がっている。

そのときの自分の顔も 真っ赤な傘の色の反射で同じ色に染まって見えていたに違いない。

そんな私の顔を見ることなく 父の大きな黒い傘は さつさと歩き出していた。

私は そんな黒い傘を追いかけのように走り出した。

追いつきたい…… いや 横に並びたかった。

父の大きな黒い傘と 私の新しい赤い傘とが並んで繋がるんだ

でも 普段から子供の私と過ごすことが少ない父は 私の歩幅も気にすることもなく 私はいつまでも父の傘の後ろを追っているばかり。

さっきまで見ていた他の親子の大小並んだ傘の繋がりが 急に羨ましくて仕方なかった。
何だか寂しくなって 私の足が止まる。

目の前の信号が変わりそうになって やっと父が振り向いた。

その場で一瞬立ち止まった黒い傘が近づいて来る。

「どづした？ どこか痛いか？」

そう言っつて 父は少ししゃがんで私の傘の中を覗き込む。

傘と傘がぶつかる……

今度は父が 自分の傘を少し高くして私の顔を覗き込む。

私は 自分を見ている父の顔じゃなく

自分の頭の上を見上げて

ついさっきまでの半泣き顔から 一気に笑顔になった。

赤い小さな傘の上に 大きな黒い傘が 一回りも二回りも外側に重
なつて見えて

まるで傘の二重丸のようだった…… しかも色付きの！

「お父さん！」

「どづした？」

「傘持ってきてくれて ありがとう」

私がそう言い終わったとき 目の前の信号が変わって 父が渡り出した。

もう 羨ましくも寂しくもなく

私は目の前の大きな黒い傘を見ながら 父の後ろを歩いていた。

そんなことを思い出した今は もう 父の黒い傘はなかった。

でも 今は

あのとときの傘のように 私の外側を包み込むような父の存在を感じていた。

「ずっと 二重丸作って 守っていてね」

そうこころの中で祈るように 私は その傘を持って帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2756v/>

雨の日の二重丸

2011年10月9日11時49分発行